徳島大学 i.school での学びと成長
−参加学生の視点より -

高田太陽[1)], 玉有朋子[2)3)], 片山哲郎[2)4)5)], 小出静代[2)6)], 金井純子[2)5)], 北岡和義[2)3)7)]
1)徳島大学生物資源産業学部, 2)徳島大学 i.school, 3)徳島大学高等教育研究センター, 4)ポスト LED フォトニクス研究所, 5)徳島大学大学院社会産業理工学研究部, 6)徳島大学総務部未来創造課, 7)徳島大学教養教育院

１．はじめに

徳島大学 i.school は、一般社団法人日本社会イノベーションセンター(JSIC)が運営する東京大学発イノベーション教育プログラムである「i.school」の全国初の認可をうけ、人間の創造性に関する「学術的知見」等に基づいてワークショップを設計、ファシリテーションすることによって革新的アイデアを創出できる人材の育成を目指す徳島大学で実施されている教育プログラムである。ここでは i.school が開発した「イノベーションワークショップ」を中心としたワークショップ手法を使用し、JSIC からの資格認定を取得した教職員がプログラムを提供している。2022 年度から始まり今年で 2 期目となり、本年度の参加学生は年６回のレギュラーワークショップを通じてイノベーションワークショップの手法やアイデア評価手法を学んでいる。発表者は 2022 年に徳島大学 i.school に参加し、2 年目の今年はイノベーションワークショップを支援するディスカッションパートナー（DP）として参画している。ここでは徳島大学 i.school がどのような取り組みを行ってきたのか、そしてそれに参加したことで筆者がどのように成長してきたのか述べていきたい。

2. 徳島大学 ischool のワークショップ設計

徳島大学 i.school ワークショップは大まかには「目的の分析」→「手段分析」→「アイデア発想」→「アイデア評価」と進む。目的分析とはワークショップで生み出される手段が果たす目的を分析することを指す。生み出す手段が製品やサービスの場合は、顧客の求めることを明らかにすることである。そのために、与えられた事例からテーマにとって重要と考える事実を抜き出し論証的推論を行い（解釈）、解釈をもとに不確かだがテーマに関するイノベーションに結び付く抽象度の高い推論（示唆）を行う。この事実、解釈、示唆を進めることでより根源的な問題や欲求を発見することができる。目的分析で見出した潜在ニーズや未来仮説を解決・実現する手段を分析することが手段分析である。生み出す手段が製品やサービスの場合は既存のヒット商品がどのようにして顧客のニーズに応えているか分析することで、新たな製品やサービスを考えるときに役に立つ。目的分析で求めているものを分析し手段分析を参考にしながらアイデア発想を行う。そして、生み出されたアイデアを評価し、さらに良くするためには何が必要なのかを話し合う（アイデアの精緻化）。このような設計で徳島大学 i.school はワークショップを行っている。目的分析と手段分析は様々な種類が存在しここでは説明しきれないため、今回紹介するワークショップに出てきた手法のみその場で説明する。

3. レギュラーワークショップ

3-1. 優しい人口減少

まず紹介するのは 2023 年 5 月 27 日（土）、28 日（日）に行われたワークショップ 02「優しい人口減少」である。このワークショップは徳島県勝浦町で 1 拍 2 日にて行われた。ワークショップの趣旨は人口が減少している社会においてもその変化を前むきにとらえ豊かに幸せに暮らし続けることは可能ではないかという視点から「優しい人口減少社会」になるための手段アイデアを考えることであった。設計としては事前学習（アクティブ・ブック・ダイアローグ®（ABD））→目的分析

（エスノグラフィックアプローチ）→アイデア発想→スキット（寸劇）であった。ABD とは一冊の本を裁断し担当ごとで各パートを読み、リレー方式で発表し疑問や質問を話し合うことで、新しい気付きを得るという読書法である。今回は「サピエンス現象-縮減する未来の課題を探る（著書 原原俊彦著　岩波新書）」を読み人口減少の現在を学び、「優しい人口減少社会」を考えるきっかけとした。エスノグラフィックアプローチとは、現場観察やインタビューを用いることで、先入観や偏見を排除して目的分析する手法である。今回は合宿所周辺の観察と勝浦町で活躍されている人物に対してのインタビューを行い目的分析を行った。実際に現場観察やインタビューを進めることで、文章では得られない勝浦の魅力や課題などを発見することができた。今回は時間の都合上、目的分析のみを行いアイデア発想を行った。最後には生み出たアイデアについて寸劇を行いアイデアの実現した未来について発表した。徳島大学 i.school としては初めての合宿であったが、フィールドワークが多めなワークショップやバーベキューなど交流の場を多く持ったことで徳島大学 i.school 生同士の親睦が深まったと思う。

3-2.「働くこと」の未来

次に 2023 年 6 月 21 日（水）、28 日（水）、7 月 5 日（水）にオンラインにて行われたワークショップ 03 について紹介する。ワークショップ 03 では「働くこと」の未来をより良くする手段アイデアを考えた。ワークショップ設計は目的分析（未来探索アプローチ）→手段分析（アナロジー分析）→アイデア発想→アイデア評価、精緻化であった。１日目は「働くこと」に何も求めているかを未来社会の在り方に関する主張や報告書などの事例を分析（未来探索アプローチ）しながら紐解いた。２日目は１日目にでた「求められているもの」を解決、解消するようなアイデアを出すために手段分析としてアナロジー分析を行った。アナロジー分析とは既存の製品やシステム（アナロジー事例）の構造や機能性を分析することである。アナロジー分析をすることで一目見ただけではわからないような、構造や機能性を発見することができ、その構造や機能性を利用して「求めているもの」を解決する手段アイデア発想を行うことができる。アナロジー分析の後はアイデア発想を行った。３日目は２日目に生まれたアイデアとアナロジー事例との間でどのような類似性があるのかを分析評価を行った。その後、アイデア自体をさらに良くするために、チームごとに論点を作り何が問題なのか、さらに良くするためには何が必要なのかを話し合った。

今回のワークショップではアナロジー分析で躓く人が多かった。また、学生 DP としてはアナロジー分析やワークショップ全体の深い理解を求められる非常に難易度が高く大変であった。

4.学生ＤＰとしての学び

発表者は 2023 年度から学生 DP として徳島大学 i.school に参画しているが、一期生として参加した 2022 年度徳島大学 i.school とは全く違う方向で成長を感じている。2022 年度ワークショップに参加する側の立場では、より質の高い示唆やアイデアを出せるように努力をし、人とは違う観点で事例を見るようにしていた。つまり、自己の思考力や分析能力の向上を目標としていた。2023 年度から学生 DP としてワークショップを支援する側に回ったことで、人の話をしっかり聞く、話を引き出す、話をまとめるという対人能力が求められるようになり、コミュニケーション能力は向上したと感じている。本を読めば、i.school のイノベーションワークショップ手法を表面的に理解できるかもしれないが、学生ＤＰとしてワークショップの設計から参加し、実際に手法を使うことで無意識下での理解が進み、普段の生活においても本手法を応用できるようになると筆者は考えている。

参考文献

堀井秀之（2021）『イノベーションを生むワークショップの教科書 i.school 流アイディア創出法』日経 DP